

Nidānaśamyukta 20 に於ける遺体供養について

名和 隆乾 (大阪大学大学院)

近年、インド仏教における葬儀の研究が進展してきたが、在家信者の葬儀と出家僧達との関わりについては未だ詳しいことはよく分かっていない。しかし例えば釋舎 [1986, p.40] は、『善見律毘婆沙』、『南海寄歸内法傳』、『大唐西域記』の記述に基づいて、在家信者に葬儀を行うことは極力避けられたと推測した。また寺崎 [1991] は、「無常經」が葬儀で用いられる場合は出家僧の火葬に際してであり、在家信者の葬儀を述べたものは全くないことから、出家僧は在家信者の葬儀を行っていなかったと推測した。

一方、Nidānaśamyukta 20 (Tripāthī [1962, pp.170-179]. 以下、NidSa と略記) には興味深い用例が見られる。以下に NidSa 20 の概要を示す：

Acelakāśyapa という人物がブツダと問答を交わし、ブツダに圧倒される。Acelakāśyapa は三帰依を一唱し、upāsaka となることを宣言した後、ブツダのもとを去る。しかしその直後、Acelakāśyapa は牛と接触して死亡してしまう。死に際し、Acelakāśyapa の感官達は澄み渡っていて、顔色はすっかり清浄で、肌の色はすっかり清澄だった。その後、托鉢に出かけた比丘達が Acelakāśyapa の顛末を聞き知った。比丘達は托鉢から戻ると、Acelakāśyapa の顛末をブツダに報告し、Acelakāśyapa の再生先を尋ねた。するとブツダは Acelakāśyapa が優れた人物であったことを述べ、比丘達に Acelakāśyapa のśarīrapūjā を行うよう指示した。

ここでは明らかに upāsaka となった Acelakāśyapa に対してśarīrapūjā が指示されており、しかもその担い手が出家僧である。ブツダ自身がśarīrapūjā を指示する点も注目される。この様に出家僧が非出家僧に対してśarīrapūjā を行う用例は、管見の限り、これまで指摘されていないと思われる。

しかし、冒頭に述べた様な在家信者の葬儀に関する研究を考慮すると、当該用例における Acelakāśyapa という人物、upāsaka という存在について慎重になっておく必要がある様に思われる。そしてこれらに対する若干の考察は、「信仰とは何か—仏弟子ということ—」というテーマに関連するものと思われる。更に、当該用例で、なぜ Acelakāśyapa に対してśarīrapūjā が指示されたのか、NidSa 20 パラレル資料 (パーリ、漢訳、藏訳) を用いつつ、その理由の解明を試みたい。

参考文献

Ch. Tripāthī (ed.) [1962] *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānaśamyukta*, Berlin.

釋舎幸紀 [1986] 「無常經の思想的意義——特に「無量光仏礼賛文」への展開を求めて——」『高田短期大学研究紀要』4, pp.14-49.

寺崎敬道 [1991] 「根本説一切有部についての一考察—三啓無常經の宗教的意味—」『印度學佛教學研究』39(2), pp.566-568.

キーワード：Nidānaśamyukta, śarīrapūjā, upāsaka